

東海の古代

第280号 2023年12月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

邪馬壹国の所在地と邪馬台国小国論

名古屋市 田沢 正晴

1. 邪馬壹国は八女

多くの古代史ファンの心を捉えて離さない邪馬台国。その所在地を巡って江戸時代以降300年にわたり様々な説が提唱されてきた。その所在地が記されているのは『魏志』倭人伝（以下「倭人伝」とする）であるが、そこには邪馬壹国と書かれているので、以下邪馬台国とは言わず邪馬壹国を用いる。それでは早速、その邪馬壹国へご案内しよう。

倭人伝には、帯方郡からの道順が方位と里数によって詳細に示されている。朝鮮半島南端の狗邪韓国、対海国（対馬）、一大国（壱岐）、末盧国（唐津）まではほぼ異論がない。末盧国の東南500里の伊都国については、多くの方々が唐津の東北に位置する糸島平野に比定されている。これに対して、伊都国は吉野ヶ里だと私は確信している。伊都国を吉野ヶ里とした根拠については「東海の古代277号（本年9月）」をご参照頂きたい。

伊都国（吉野ヶ里）から東南100里で奴国（久留米市三瀧町）、東100里で不弥国（広川町）、さらに1300里で邪馬嘉国（熊本県山鹿市）に到着する。これが「第一の女王国」である。邪馬嘉国についての詳細は「東海の古代279号（本年11月）」をご参照願いたい。そこには帯方郡から邪馬嘉国までが一直線となる地図も掲載している。

邪馬嘉国は南方の狗奴国に攻められたため、福岡県八女市の邪馬壹国へ遷都する。遷都後の邪馬壹国が「第二の女王国」である。倭人伝には確かに「南至邪馬壹國 女王之所都」と記されている。

女王国へは郡使が2回来訪している。1回目は240年で梯儁が親魏倭王の印綬を倭国へ届け授けた。その時の女王国は山鹿市の邪馬嘉国である。2回目は247年の張政である。卑弥呼から援軍を求められ、張政は遷都後の邪馬壹国（八女市）に詔書、黄幢をもたらした。遷都の時期は、この240年と247年の間と考えられる。

なお、女王国が邪馬嘉国と邪馬壹国の二つあるので、倭人伝の著者陳寿は帯方郡から邪馬嘉国（山鹿市）までの距離を、「自郡至邪馬壹國 萬二千餘里」とはせず、やむなく「自郡至女王國 萬二千餘里」としたのだろう。

2. 邪馬壹国（八女）の考古遺跡

それでは、遷都後の邪馬壹（やまゐ）国が八女（やめ）市であることを検証しよう。

まず、考古学的な検討から行う。八女市の矢部川沿いで邪馬壹国と想定できる遺跡はあるだろうか。候補の一例ではあるが、八女市新庄に六反田遺跡がある。弥生時代中期から後期にかけての密度の高い集落群で、1万㎡（1ha）の広さがあり、甕棺墓群と土壇墓（遺骸を直接埋める墓）が発掘されている。

もう一つ候補地をあげる。2023年3月に発掘されたばかりの福岡県八女市吉田の吉田・辺田ノ上遺跡である。この遺跡は弥生時代後期の環濠集落跡で、鉄器や多数の竪穴式住居跡が見ついている。被葬者が筑紫君磐井とされる8世紀の岩戸山古墳の南西約300mにある。吉田・辺ノ上遺跡のさらに南には岩崎遺跡群もあって、周辺の台地全体に遺跡が広がっている可能性がある。(岩戸山歴史文化交流館 伊崎俊秋館長)

何れにしても八女には、現状では決定的な遺跡も遺物も見当たらない。それでは何故私が八女を邪馬壹国と考えたのか。それは、八女が邪馬壹の類縁地名だからである。

3. 邪馬壹(やまゐ)は連母音融合で八女(やめ)に

倭人伝に登場する対海国、一大国、末盧国、伊都国、奴国、不弥国などの地名は、何れも読み(音韻)による比定が試みられているが、邪馬壹国に限っては地名の読みをもとに比定地を定めた例がほとんど見られない。そのため、邪馬壹(やまゐ)の類縁地名が見つければ、邪馬壹国ではなく邪馬壹国が正しいことの根拠にもなり得る。ところが、いくら探しても「やまゐ」に似た地名は見つからない。そこで発想を変えて、「やまゐ」は年月を経て音を変えたのではないかと考えた。そうしたら、ついに見つかった。「やまゐ」(邪馬壹)は連母音融合によって「やめ」(八女)に変化したと考えられるのだ。

「無い」を「ねー」、「赤い」を「あけー」のように言う連母音の融合は、東日本方言や中国方言、九州方言では盛んで、北陸方言・近畿方言・四国方言ではほとんど起こらない。

「ゐ」は子音なので、いったん「ゐ」が母音の「い」に変化したあと、連母音融合したと考えられる(やまゐ→やまい→やめ)。同じ福岡県に志免という地名があるが、志免も同様に「しまい」が連母音融合で「しめ」に変化したのかも知れない。

文献でも確認しておこう。八女の地名の由来は、景行天皇が八女の地に巡幸の折、水沼の県主猿大海が「この地方に女神あり。その名を八女津媛といい、常に山中におる」と奉上了ることから八女の地名が起こったといわれる。『日本書紀』に記された景行天皇の巡幸を320年頃とすると、247年の張政の邪馬壹国派遣からの年数は70年以上あり、この年数の間に、邪馬壹(やまゐ)が八女(やめ)に変化する時間は十分あったと思われる。

4. 邪馬壹国か邪馬壹国か

ここまで、私は邪馬壹(台)国とは言わず邪馬壹国を用いてきた。古田武彦氏の論説を基本的に支持するからである。古田氏は、「壹」は魏にとって「神聖至高の文字」であり、邪・馬・卑などの卑字をあてる蛮族の国名に、敢えて至高の文字を割り当てることは、ありえないとした。さらに、塚田敬章氏は『隋書』、『後漢書』などに見える「魏臺訪議」(魏帝もしくは朝廷が意見・理由をたずねる)という言葉から、明帝(曹叡)を含む魏の朝廷を表す重要な文字である「臺」を蛮夷の国名に当てることはないとする。

邪馬壹が正しいことのもう一つの根拠を示そう。村上通典氏によれば、魏の武将、司馬懿の懿を分解すると壹と恣になり、司馬懿は司「馬壹」恣となって、邪「馬壹」国に繋がるという。倭人伝の著者陳寿は「やまゐ」の音に、邪馬壹国を魏へ取り込むことに成功した司馬懿の功績を暗に顕彰するため、馬壹の文字を意図的、暗号的に当てたのだろう。

あまり学問的とは言えないが、邪馬壹は邪馬壹の誤記では決してないことの例証の一つになり得ると思う。

| | |
|------|------|
| 邪馬壹国 | 邪馬壹国 |
| 司馬懿 | 司馬壹恣 |

5. 邪馬嘉国と邪馬壹国はともに女王国

女王卑弥呼は、南方の狗奴国から攻められて邪馬嘉国から邪馬壹国へ遷都したことを述べてきたが、「邪馬嘉国と邪馬壹国は何れも女王国である」ということを裏付ける記述が

倭人伝に隠されている。

「南至邪馬壹国 女王之所都 水行十日 陸行一月 官有伊支馬 次日彌馬升 次日彌馬獲支 次日奴佳鞮 可七萬餘戸」

「官は伊支馬が有る。次いで弥馬升という。次いで弥馬獲支という。次いで奴佳鞮という。」
邪馬壹国の官が4人挙げられており、このうち3人に馬の字がつく。根拠はなく想像だけなのだが、この3人で次のように分掌していたと考えてはどうだろう。

| 官名 | 分掌地域 |
|------|------------|
| 伊支馬 | 斯馬国または山門郡か |
| 弥馬升 | 邪馬壹国 (八女市) |
| 弥馬獲支 | 邪馬嘉国 (山鹿市) |

4人目の奴佳鞮は仲介、調整役であろうか。当然ながら、卑弥呼はこれらの各国の統括であるとともに、女王国連合すなわち倭国の盟主でもある。

6. 倭国に冊封を仕掛けたのは魏（司馬懿）の戦略

ところで、4項で「司馬懿が邪馬壹国を魏へ取り込んだ」と書いたが、このことについてもう少し説明しておきたい。司馬懿は、238年に公孫淵を滅ぼした後、倭に朝貢させるという戦略を立てたと考えられるのだ。それまでの東夷諸国は公孫氏が支配する楽浪郡、帯方郡による直轄管理だったが、公孫氏の滅亡後は魏が統治を担うことになる。その過渡期の混乱に備えるために、司馬懿は倭に対して冊封を仕向けたのである。

倭人伝には「女王卑弥呼が景初2年6月に大夫難升米等を帯方郡へ送り、魏の天子に朝献を求めた」と記されているので、倭国が魏の権威を獲得し、国力を上げる目的で、倭国側から魏に冊封を求めたとするのが定説である。しかし、冊封は通常、宗主国側からの行為であり、このケースにおいても冊封を仕掛けたのは魏（司馬懿）の戦略であると考えの方が順当だろう。年表で確認してみよう。

- ◇ 237年(景初元年) 公孫淵は燕王を自称し、楽浪郡、帯方郡も燕に属した。
 - ➡ 魏(明帝)は司馬懿を遼東に派遣。司馬懿は1年で公孫淵を滅ぼすと明帝に誓う。
- ◇ 238年(景初2年)6月 倭女王は大夫難升米等を郡に遣わし魏帝に朝献を求めた。
 - ➡ 魏(司馬懿)は帯方郡に偶々訪れた倭の難升米を利用する戦略に出る。
- ◇ 238年(景初2年)8月 魏が公孫氏(189-238年)を滅ぼし、半島の支配を確立する。
 - ➡ 魏は朝鮮半島を挟む位置の倭国と結ぶことで半島支配を背後から固めた。
- ◇ 238年(景初2年)12月 卑弥呼は親魏倭王に任ぜられ金印紫綬を授かった。(冊封)
 - ➡ 卑弥呼は魏から倭王の称号を得たとの認識だが、実は魏の策略だった。

この年表から、難升米は公孫氏が司馬懿によって滅ぼされる前に、帯方郡に到着しているので、当初は郡(公孫氏)への表敬程度のつもりだったことがよく分かる。この時の魏(洛陽)への朝献は、生口10人と班布二匹二丈である。107年に倭国王帥升らが後漢へ朝貢したときの生口160人と比べても見劣りし、初めから魏の都洛陽へ行くつもりはなかったことは明確である。では、何故難升米一行は洛陽に向かったのか。

それは、倭の難升米が帯方郡に到着したことを知った司馬懿が、この倭の使者を利用しようと画策したからである。利用の目的は次の三つである。

- (1) 倭と結ぶことで、公孫淵の背後を襲うことになるので戦いを有利にできる。
- (2) 東夷の倭国を大国に仕立てあげた上で冊封すれば、魏と司馬懿の名を高められる。
- (3) 魏のライバルである呉が倭の南部の国(狗奴国か)と通じているという情報がありその勢力と対抗するために女王国と結べば、呉の脅威を軽減できる。

卑弥呼が難升米を帯方郡に送ったのは景初2年ではなく、『日本書紀』の記載を根拠として景初3年であるとの説もある。景初2年には魏と公孫氏との間で戦闘があったので、この年はあり得ないとの見方である。しかし、上述したように倭国への冊封を企んだのは魏の司馬懿であるのだから、洛陽への道の安全は魏によって確保され、景初2年の朝貢は全く問題なく実現できたのである。

中国側から日本側へ冊封を仕掛けた例がもう一

つある。日本の南北朝時代の1369年、明の太祖は、倭寇の鎮圧を命じるとの国書をもって、後醍醐天皇の皇子、懐良親王を「日本国王」に冊封している。これも懐良親王が望んだものではなく、明の都合による冊封であり、「冊封は宗主国が行う」ことをここでも示している。

7. 筑紫国

1項で述べた邪馬嘉国（山鹿市）と邪馬壹国（八女市）の女王国2国と、帯方郡使の行路にある末盧国（唐津市）、伊都国（吉野ヶ里）、奴国（久留米市三潞町）、不弥国（広川町）の4国、そして21の傍国は何れも当時の肥国内にあったと考えている。

それではその時代の福岡平野はどうだったのか。須玖岡本遺跡などの大規模遺跡があり、この地域に奴国や邪馬壹(台)国があったと考える論者も多い。しかし、私はここには女王国連合からは独立した国があったと考えている。これを筑紫国と呼ぶこととする。

卑弥呼が帯方郡へ使者を送っていた248年頃には、倭と半島諸国、特に後に新羅となる斯盧国とは戦いを繰り返していた。1145年に完成した朝鮮の歴史書、『三国史記』によると、紀元前50年、西暦14年、73年、121年、208年に倭人が斯盧国へ侵攻した記事が見える。

さらに、232年4月に倭人が斯盧国の首都金城に攻め入ったこと、233年5月、倭人が東部国境に侵入し、同7月には將軍の昔于老が倭軍の兵船を焼き払ったことが記録されている。兵船とあるので九州から渡海して攻め込んだとも考えられる。また、249年4月には、倭人が斯盧国の將軍昔于老を殺害したとされる。

これらの『三国史記』の記事から、邪馬壹国が魏へ遣使した238年と243年の前後は、倭と斯盧国が戦闘状態だったことが分かる。ところが、倭人伝は247年の邪馬壹国と狗奴国との闘いには触れているものの、邪馬壹国が半島の国と戦ったことには全く言及していない。つまり、邪馬壹国は狗奴国とは不和で互いに攻撃していたが、半島の斯盧国とは何事もなかったと言うことになる。では、斯盧国と戦った倭は何者であろう。半島南岸の倭が単独で戦ったとも考えられるが、そもそも戦う目的は辰韓で産出する鉄の利権に関連すると見るのが自然だろう。もし、そうなら半島南岸の倭だけでなく、鉄の交易の恩恵を受けていた筑紫国も参戦していたはずである。『三国史記』には「兵船」の記述もある。

『日本書紀』にもこれと似た記事があるので紹介する。

「249年（神功皇后摂政49年）、荒田別・鹿我別を派遣し、百済の木羅斤資らと共に新羅（斯盧）を破る。」

232年と233年の出来事は、倭の敗北であるので『日本書紀』は記録を残さなかったが、249年に倭が斯盧を破ったことは『三国史記』と『日本書紀』で、内容も年代も一致する。書紀では景初3年（239年）を神功皇后39年としているので、249年はピッタリ合う。これで、筑紫国と半島の倭が協力して辰韓の斯盧と戦っていたことが、日本と朝鮮の両方の史書で明らかになった。

これまでの検証で、筑紫国と女王国連合はそれぞれ別に存在していたことが証明できた。つまり倭国とは、肥国（女王国連合）、筑紫国（半島の南岸を含む）、狗奴国の三国で構成されることになる。鉄器を持ち強大国である筑紫国が、それほど強国とは言えない女王国に属することはほぼあり得ないし、狗奴国が女王国に属していないことは、倭人伝に記されている。

8. 邪馬台国小国論

この項では、邪馬台国論争について述べるため、「邪馬壹国」をその通称である「邪馬台国」と表記する。邪馬台国論争では比定地にのみ目を奪われ過ぎて、邪馬台国が大国なのか小国なのかの議論はほとんど行われていない。倭の女王、卑弥呼の住む首都なのだから、日本の中心であって最先端都市であるというイメージが定着しているのが現状である。では、本当に邪馬台国は大国かつ先進国だったのだろうか。

私は、倭国大乱後に卑弥呼が共立されたこと、このこと一つ取っても女王国は小国であったと見ている。倭国大乱は桓霊の間（146～189年）の数年間に起きたと『後漢書』にある。戦乱の原因は倭国王位の承継をめぐる争いとする説もあるが、その場合は軍事力、経済力に優れた勢力が勝者となるであろうから、女王を共立して平和的に収まるとは思えない。

倭国大乱の原因については、もう一つ、2世紀後半の気象変動の影響を受けた土地収奪争いによるものとする説もある。そうであれば、気候変動の収束に伴って争いも緩やかとなるはずなので、話し合いによる共立は納得できる。戦いを勝ち抜いたのでなければ、女王国（邪馬台国）は大国である必要はない。むしろ、互いに争った30か国と同程度の規模と考える方が自然である。

邪馬台国は小国であるがゆえに、狗奴国から攻撃を受けた。そして30か国の連合をもってしても抗しきれず、魏へ支援を求めることになった。そもそも、邪馬台国は、辰韓の斯盧国と戦った筑紫国のような軍事力は持たなかったのだろう。海を渡って斯盧国を攻められるほどの武力が邪馬台国にあれば、狗奴国は攻めてこられなかったはずだ。

魏の司馬懿は邪馬台国が弱小国であることを承知のうえで、強大国である筑紫国や狗奴国とは結ばず、手なずけやすい邪馬台国を冊封国に選んだと考えられる。明の洪武帝が懷良親王を日本国王に冊封したこととよく似ている。

以上述べてきた邪馬台国小国論が成り立つとすれば、八女市に大規模遺跡がなくても、邪馬台（壹）国を八女市に比定する根拠の一つになるだろう。一方、大国であり先進国ではあるが邪馬台国ではない、ヤマト国や筑紫国はどうか。もちろんその後さらに発展を遂げて、ヤマト王権、九州王朝につながっていくのである。

ヤマト邪馬台国への道のり

—宮市 畑田 寿—

邪馬台国の所在地については九州から近畿地方まで西日本一帯に候補地が挙げられているが、未だ見解の一致が見られていない。今回は最も東の近畿地方の場合、どの様な経路を辿ればたどり着けるか諸説を見比べてみたい。なお、検討に際しては『魏志』倭人伝（以下、倭人伝とする）を全く無視する説は対象外とした。

1 ヤマト説と九州説との違い

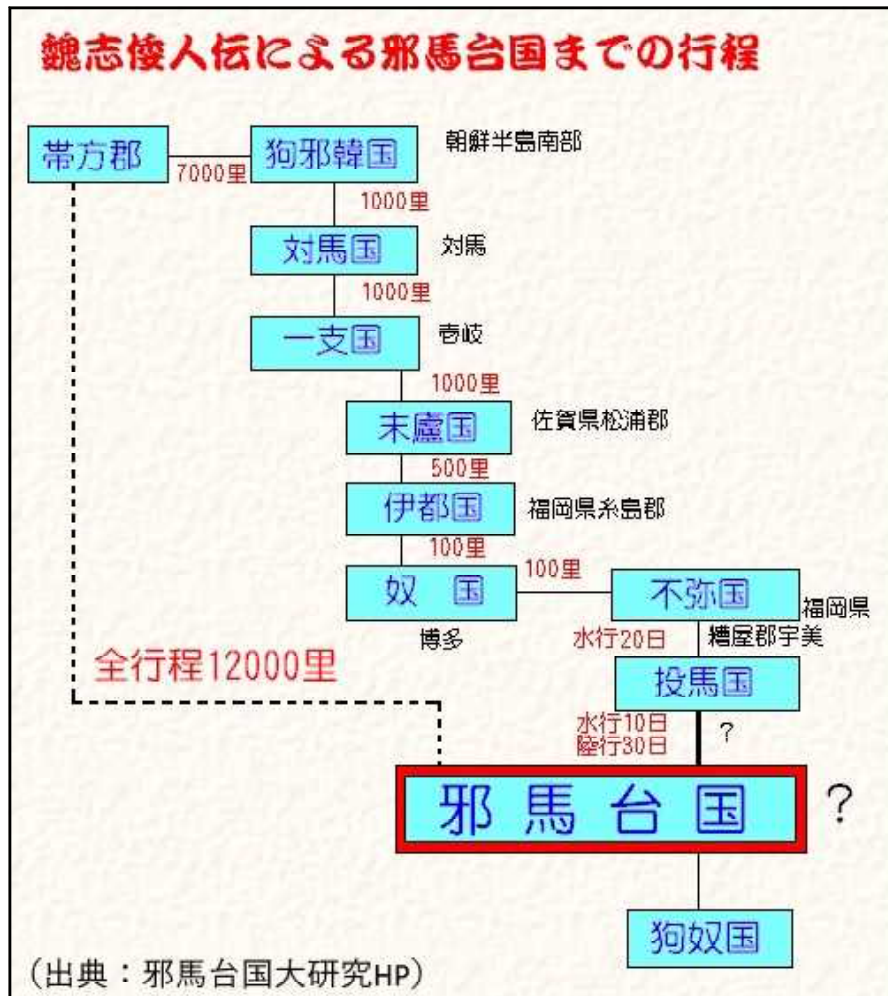
ヤマト説と九州説との違いは、伊都国や不弥国から先に邪馬台国に行くには「水行10日陸行1月」とみるか、「水行10日陸行1月」を別な話とみるかにかかっている。しかし末羅国や伊都国、奴国、不弥国の比定地は若干違っていても九州内との認識は大方変わらない。

2 寺沢薫氏のヤマト王朝論

纏向学の創始者であり、纏向遺跡こそ3世紀初頭の日本の中心であったと主張されている寺沢薫氏は最近『卑弥呼とヤマト王権』（中公選書、2023年）を出版された。その中で氏は次のように述べられている。（文責：筆者）

- ① 女王国は卑弥呼が居た国であり、邪馬台国は共立国の一つである。当時クニは部族が支配しており、九州以外にイズモ、タニハにも勢力拠点があった。九州王朝論はイトを中心とした勢力に過ぎない。
- ② 共立の目的は公孫氏に対応するための勢力の統一であった。
- ③ 箸墓古墳は卑弥呼の墓ではない。初期前方後円墳こそ3世紀前半の墳墓である。
- ④ 私はヤマトを中心とした勢力をヤマト王朝と呼ぶ。その実態は各地の勢力の上に君臨する倭を代表する「国」であったが、地方の豪族とは連合関係にあった。

ヤマト王朝論は学ぶことが多いが、卑弥呼の居場所についてはこの論でいけばどこでも良い事になる。魏との外交に関わる出土品が発見されない限り決着をみないであろう。



3 ヤマト説での「水行10日陸行1月」

先行諸氏の説を紹介すると次のものがある。なお説は井上筑前氏の『邪馬台国大研究』（梓書院、2009年）の資料を参照させていただいた。

(1) 内藤虎次郎（湖南）

不弥国から南へ行くと投馬国、更に南へ行くと邪馬台国に着くと記載されているが、この南は東の誤りである。投馬国は今の山口県防府市にあたり。瀬戸内海を船で行き、10日後山陽の何処かに上陸し、陸を1ヶ月で大和に達した。

(2) 三宅米吉

投馬国からの水行10日陸行1月は、水上を行けば10日、陸上なら1ヶ月と言う意味である。不弥国からの陸行30日は、平安京から太宰府までの公定所要日数が30日である事から、大和説を裏付ける。

(3) 笠井新也

不弥国から東へは船で行った。瀬戸内海以外に日本海ルートもあった。投馬国は瀬戸内海ルートでは広島県付近であり、日本海なら出雲（島根県）か但馬（兵庫県）であろう。

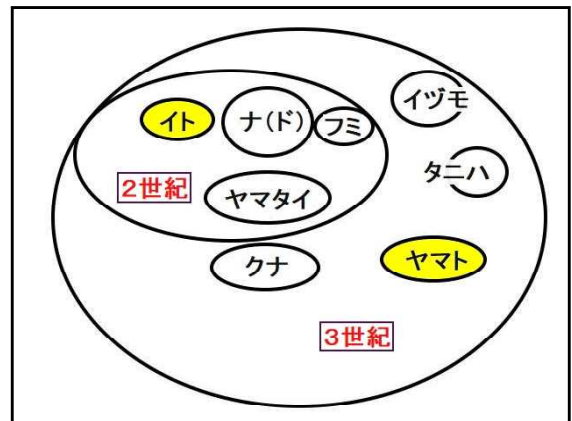
(4) 三品彰英

倭人伝の編者陳寿は、日本列島を東西に延びているのではなく南北に延びていると思っていた。従って、大和を不弥国から東なのに南と思いこんでいたのである。行程を考えれば邪馬台国は当然大和となる。

以上の意見を眺めると、次の2点である。

- ① 倭人伝での「南」は「東」の間違い。
- ② 水行10日は瀬戸内海か日本海で広島付近。残りは陸行で1ヵ月を要した。

なお、瀬戸内海での水行は全体の3分の1にあたり、距離からみて水行の方が1.5倍程度速い勘定になる。なお、「延喜式」ではヤマト九州間を20日と定義しており、少し時間がかかり過ぎる気がするが、3世紀ではこの程度かもしれない。



4 「自郡より女王国に至るまで万二千余里」の解釈

倭人伝の道のりを集計すると不弥国まで1万700里となり、1300余里しか残らない。これをどの様にしてヤマトまで行ったのかに言及した先行諸氏は見当たらないが、無理やり理屈をつけると次の事が考えられる。

- ① 不弥国までの道のりには異存が無いので、地図上の距離からみて「短里（70～85m）」の存在は認めているとする。
- ② 短里を70mとすると帯方郡からの直線距離12000里は800Km程度になり女王国は九州に納まるが、85mでは1000Kmとなり、直線距離でヤマトに届く。しかし、直線距離換算では不弥国は九州に納まらない。



① 従って、短里は85mを採用したとし、「不弥国までの道のりは実際に辿った道のりで、女王国までの距離は直線距離」とすると何とか説明が付くことになる。

5 ヤマト邪馬台国へ行き方への疑問

上記の結果、ヤマトに邪馬台国が存在できる可能性の見通しはついたが、大半のクニが九州にある状態で、なぜ邪馬台国だけが遠く離れた地にあるのか、このような状態で統治が可能であったのかが最大の疑問点として残る。

更に、ヤマト邪馬台国に至る道のりは日本列島に着いてからは陸—海—陸を繋ぎ合わせて行ったとされているが、1枚1.2Kgで総量120kgにもなる鏡を輸送するには、通常では船で運ぶと思われる。

そこで、この行程を正始元年（240年）に帯方郡の太守が詔書や鏡を持ってきたことを

表すと考え、末盧国に上陸後、国内各地を練り歩き、鏡を配って歩いたとする。それならば陸上の移動に時間が掛かるのも納得できるし、陸—海—陸の行程も納得できる。しかし、瀬戸内海などの国々の記述が無いのは腑に落ちない。

6 陳寿が言いたかったこと

あまり話題にされてこなかったが、倭人伝で陳寿はなにを言いたかったのでしょうか。「(女王国の中心は) その道里を計るに、まさに会稽・東冶の東に在るべし。」であろう。指摘する地点は奄美大島あたりで、帯方郡から南に行けば短里85mで12000里の直線距離にあたり、東に行けばヤマトに到着する。そして奄美大島は呉の首都(建業)の東にもあたる。陳寿は言外に「魏は倭と同盟を結んだ。倭の中心勢力は呉の東方に位置し、事が起これば背後から侵攻する。」と言いたかったのでは無いか。この為、女王国の位置を「南」とのみ記して読者の判断に任せた。

更に、「南して投馬国に至る。水行すること20日なり。」についても一考を要する。多くの先行諸氏は出発点を不弥国としているが、前述の「東への水行10日」は広島あたりであったので、南へ20日の場合九州の東南部になり、呉の侵攻には役立たない。出発点を帯方郡として済州島あたりと考えると、呉の軍勢が東シナ海から黄海を經由して侵攻した場合、今や同盟軍となった投馬国5万の勢力が途中で待ち受けており、呉の侵攻を阻止することになる。これを陳寿は「投馬国もあるよ。」程度でつぶやいた。策士の面目躍如であろう。

7 まとめ

以上のように、倭人伝を少し斜めの方向から眺めてみると新しい視点が見えてくる。『三国志』の中では距離は全て当時の1里400m程度で記述されており、朝鮮半島南部と日本列島だけが短里で記述されている。しかも現在までの調査では中国全土において短里の存在は発見されていない。短里は恐らく陳寿の創作であろう。しかも九州の地理を表すのに短里70mを使いながら女王国の中心地を求めるにあたっては短里85mに誘導しようとした。「ヤマト邪馬台国説」も陳寿の作戦に嵌められたのではないか。

このような観点から倭人伝の眺めると、「なぜ倭国伝で無く倭人伝か」、「風俗を紹介しながら南方のイメージを持たせる」、「礼儀正しく上司の命令に忠実」、「航海能力に優れる」など、読者に対して倭が戦闘の場合手強い相手と思わせる記述が目立つ。倭人伝の研究が手詰まり状態にある中、今一度原点に立ち返る必要があるのではないか。

『日本書紀』における倭人伝の引用(2)

瀬戸市 林 研心

3 神功皇后紀で引用している「景初3年」条について

神功皇后摂政39年では、「明帝景初三年六月に郡に訪問し、皇帝に朝献したいと求めた」と記述されているが、魏志倭人伝では「景初二年六月」と記述している。中国史書でも「表2」の通り「景初二年説」と「景初三年説」の2説存在する。

通説は、景初三年(古田武彦^{*1}、水野 祐^{*2}を除く)の事としている。その論拠は次のとおりと思われる。

4 「景初三年」とする根拠

(1) 『三国志』において、魏・明帝が公孫淵を討伐した経過は次のとおりである。

*1 古田武彦：『「邪馬台国」はなかった』92～104頁参照

*2 水野 祐：『評釈 魏志倭人伝』501～505頁参照

明帝紀^{*1}：二年春正月 詔太尉司馬宣王帥衆討遼東

(中華書局版二十四史『三國志』111頁)

六月軍至遼東 淵遣將軍卑衍・楊祚等 步騎數萬屯遼隧 圍塹二十餘里
宣王軍至 令衍逆戰 宣王遣將軍胡遵等 擊破之

宣王令軍 穿圍 引兵東南向 而 急東北即趨襄平 衍等恐襄平無守 夜走 諸軍進至首山

淵復遣衍等迎軍 殊死戰 復擊 大破之 遂進軍造城下爲圍塹 會霖雨三十餘日 遼水暴長 運船自遼口 徑至城下 雨霽 起土山脩櫓 爲發石連弩射城中…

八月丙寅夜…… 壬午 淵衆潰 與其子脩將數百騎 突圍東南走 大兵急擊之 當流星所墜處

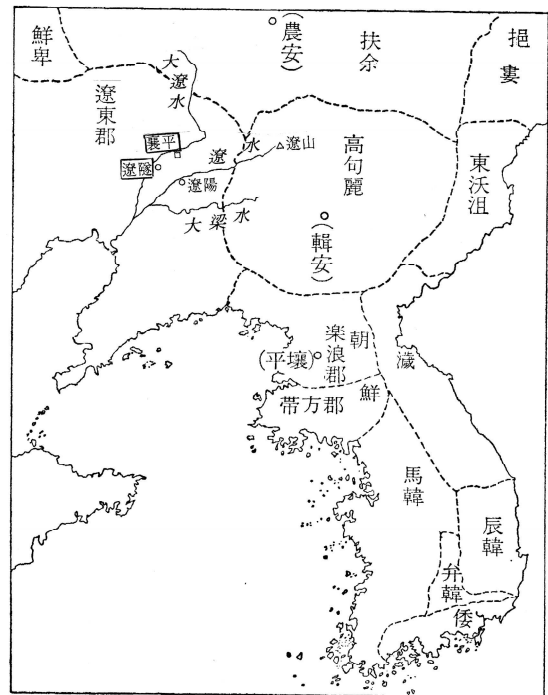
斬淵父子 城破 斬相國以下首級以千數 傳淵首洛陽遼東・帶方・樂浪・玄菟 悉平

(中華書局版二十四史『三國志』254頁)

明帝紀：(二年秋八月) 丙寅 司馬宣王圍公孫淵於 襄平 大破之 傳淵首于京都 海東諸郡平

(中華書局版二十四史『三國志』112頁)

図2 朝鮮半島図



『古代朝鮮^{*2}』57頁図より作図

明帝から公孫淵討伐の命を受けた司馬宣王は6月に遼東に到着した。

公孫淵は前線基地として遼隧に20里以上の圍塹巡らして待構えていた。公孫淵は卑衍等に迎え撃たせたが、司馬宣王の胡遵等によって撃破された。

そして、司馬宣王は公孫淵が居住している襄平を包囲したのち、8月には公孫淵を殺害した^{*3}。

(2) このことから、「景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等 詣郡 求詣天子朝獻……」については、戦火の最中に郡を訪問することは不可能であるとした。

故に、翌年の景初三年六月、倭女王は使者を遣わし、帯方郡を訪れ、明帝に詣でて朝獻したいと申出したところ、「…… 太守劉夏 遣吏將送詣京都」と、帯方太守劉夏は役人と兵士でもって京都へ案内したと推定している。

5 「景初三年」とする問題点

(1) 景初三年の状況

① 明帝は、景初二年十二月に病につき、翌年正月に死去した。

② 明帝が重体になった時、斎王を皇太子にした。同日皇帝とした。そして、斎王は喪に服したと思われる。

事例として、明帝の死により諸行事が中止となり、正始年間で再開された事例がある。

*1 明帝紀：『三國志』卷三 魏書三 明帝紀第三。

*2 『古代朝鮮』：井上秀雄著、NHKブックス172、日本放送出版協会、昭和47年11月25日

*3 「別紙『晉書』卷一 帝紀第一 高祖宣帝(抜萃：公孫淵討伐)」参照

劉劭伝^{*1}：景初中、受詔作「都官考課」…… 又作「說略」一篇 臣學寡識淺 又以爲宜制 禮作樂 以移風俗 著「樂論」十四篇 事成未 上 會明帝崩 不施行 正始中 執經講學 賜爵關内侯 (中華書局版二十四史『三國志』619・620頁)

③ 喪が明けたのは、

齋王紀^{*2}：「(景初三年) 秋七月上始親臨朝、聽公卿奏事」

(中華書局版二十四史『三國志』118頁)

と、七月に始めて自ら朝会に出席して、公卿の上奏を聞いた時からと思われる。

(2) 即位した齋王は少年であった。

① 皇帝となった齋王は少年(八歳^{*3})であったので、

正始二年(240年) 春二月 帝初通論語…… (中華書局版二十四史『三國志』119頁)

と、初めて論語の勉強をした。

② 四年(242年) 春正月帝加元服 …

(中華書局版二十四史『三國志』120頁)

と、正始四年正月に元服した。

(3) 齋王の景初三年の業績

① 齋王は皇帝に即位すると次のような詔勅を下した。

詔曰「朕以眇身 繼承鴻業 瑩瑩在疚 靡所控告 大將軍・太尉奉受末命 夾輔朕躬 司徒・司空・冢宰・元輔 總率百寮 以寧社稷 ……」(中華書局版二十四史『三國志』117頁)

と、朕は心細い思いをしているが、大將軍と太尉は先帝の命令をうけて朕を補佐し、司徒・司空等は百官を統率して社稷を安じると述べている。

② 景初三年十二月、詔曰「烈祖明皇帝 以正月棄背天下 臣子永惟忌日之哀 其復用夏正 雖違先帝通三統之義 斯亦禮制所由變改也 又夏正於數爲得天正 其以建寅之月爲正始元年正月 以建丑月爲後十二月」 (中華書局版二十四史『三國志』118・119頁)

と、明帝が景初元年に暦を「夏正から殷正」にしたことを、再び「夏正」に戻したことである。

そして、翌年「正始」と年号を変え、齋王の治積が本格的に始ったことである。

(4) 少年である齋王が、皇帝として景初三年十二月に「詔書 報倭女王曰「制詔」」の内容での東夷の辺鄙な国からの朝献したことを喜び

・倭女王を「親魏倭王」と称させ、假に「金印紫綬」をした

・遣使に官職「率善中郎將・率善校尉」を与え、假に「銀印青」を授けた。

・献上品に対する過大な下賜品

を示したことが、新皇帝が行ったとは考えられない。

(5) 吳主伝^{*4}：(赤烏) 二年(※239年、魏・景初三年) 春三月 遣使者羊衞・鄭胄 將軍孫怡 之遼東 擊魏守將張持・高慮等 虜得男女 (中華書局版二十四史『三國志』1143頁)

と、景初三年三月、吳軍が遼東に侵攻し、捕虜を得たと記述されているが、いつまで遼東に滞在していたかは不明である。それにより倭女王の遣使が景初三年六月に帯方郡に着き、十一～十二月に京都に着けるか判然としない。

(6) また、景初三年に朝献が行われたとするならば、同時に下賜品を授ければ済むことである。なぜ、翌年度の正始元年に太守が「詔書・印綬・下賜品」を届けた理由が分からない。

*1 劉劭伝：『三國志』二十一 魏書二十一 王衛二劉傳傳第二十一・劉劭伝

*2 齋王紀：『三國志』卷四 魏書四 三少帝紀第四・齋王紀

*3 八歳：「明帝紀第三」の景初三年条の注釈『魏氏春秋』曰 時太子芳年八歳 秦王九歳 在于御側

(中華書局版二十四史『三國志』114頁)

*4 吳主伝：『三國志』卷四十七 吳書二 吳主傳第二

6 「景初二年」とする理由

(1) 明帝紀では、景初二年正月に明帝が司馬宣王に公孫淵の討伐を命じたと記述されている。

(2) 明帝は、公孫淵を討伐するため司馬宣王を派遣したが、その他に烏丸鮮卑東夷傳・韓伝*1 及び序文*2に

- ・景初中 明帝密遣 帶方太守劉昕・樂浪太守鮮于嗣 越海 定二郡 諸韓國臣智 加賜邑
- ・景初中 大興師旅 誅淵 又潛軍浮海 收樂浪・帶方之郡 而後海表謐然 東夷屈服

(中華書局版二十四史『三國志』851・840頁)

と、明帝は討伐の手助けをするため、別働隊として樂浪太守・帶方太守をひそかに渡海させて、各々樂浪郡と帶方郡を平定させた。この結果は東夷の諸國に伝わったと思われる。

公孫淵は遼隧に圍塹を造る事に全力をあげているので、樂浪郡等に援軍を派遣することは出来なかったため、平定した時期は不明であるが、二・三月に急襲すれば短期間に平定できたと思われる。

(3) 倭女王は使者を派遣して、魏が平定した後の帶方郡には六月に着き、帶方太守に明帝に詣でて朝獻したいと申出したところ、帶方太守は役人と兵士を同行させ、安全に魏の都（洛陽）まで案内した。そして、十一月には都に到着したと思われる。

(4) 明帝は、遼東地域を平定した直後、東夷の辺鄙な国から倭女王がわざわざ朝獻に詣ったことを喜び、倭女王にねぎらいと詔書が次のように下された。

- ・遙か遠いところから、使者を送り献上物をよこした。これは汝の忠孝の表れであり、汝の哀情に心を動かされた。
- ・倭女王（卑弥呼）を親魏倭王と称号を授与し、遺使に官職の授与をした。
- ・献上品「男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈」に対して「絳地交 龍錦五匹、絳地縹粟罽十張、蒨絳五十四、紺青五十四」を下賜する。
- ・さらに、「紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十四、金八兩、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹各五十斤」を倭女王に下賜する。
- ・これらの授与・過大の下賜品は、倭女王国の人々に魏が深く心を注いでいる知らしめるためだ、

と述べていることは、明帝の意思により行ったと推定できる。。

(5) ただ、明帝は十二月には病気になり、倭女王に対する十分対応が出来なかったと推定され、正式な授与は次皇帝の正始元年になった。

(6) 実際の授与は、景初三年正月に明帝の死去、及び三月に呉による遼東の侵攻により通行が危険となり、翌年の正始元年になった。その授与状況は次のとおりである。

正始元年 太守弓遵 遣建忠校尉梯儁等 奉詔書・印綬 詣倭國 拜假倭王 并齎 詔 賜金・帛・錦・罽・刀・鏡・采物 倭王 因使 上表答謝恩詔 (中華書局版二十四史『三國志』857頁)

7 参考

(1) 韓伝では、帶方郡と韓・倭との関係は次のように記述している。

建安中 (※後漢・献帝 196～220年) 公孫康 (※公孫淵の父) 分屯有縣以南荒地 爲帶方郡 遣公孫模・張敞等 收集遺民 興兵伐韓濊 舊民稍出 是後倭・韓遂屬帶方

(中華書局版二十四史『三國志』851頁)

と、公孫康は屯有縣以南を分割して帶方郡とし、公孫模等らによって韓・濊をうたせた。その結果、倭・韓は帶方郡の支配を受けることとなったと述べている。

*1 韓伝：『三國志』卷三十 魏書三十 烏丸鮮卑東夷傳第三十・東夷（韓伝）

*2 東夷序文：『三國志』卷三十 魏書三十 烏丸鮮卑東夷傳第三十・東夷

景初二年、明帝によって帯方郡は平定された。是を受けて、倭女王が魏に遣使を送ったのは、先見の明があったと思われる。

(2) 水野祐は、楽浪郡・帯方郡の平定は景初元年に行われた、それ故、景初二年六月には、倭女王の使者は帯方郡を訪ねることができたと述べている。

表2 卑彌呼の魏への遣使（景初二年、三年）記事一覧

| 景初 | 史書・目次 | 記 事 |
|----|--|--|
| 2年 | 三国志 卷卷三十 魏書第三十 烏丸鮮卑東夷傳第三十（倭人） | 景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都 其年十二月 詔書報倭女王曰「制詔 親魏倭王卑彌呼 ……」 |
| | 通典 卷第一百八十五 邊防一 東夷上（倭） | 魏明帝景初二年 司馬宣王之平公孫氏也 倭女王始遣大夫詣京都 貢獻 魏以為親魏倭王 假金印紫綬 |
| | 冊府元龜 卷九六三 外臣部 封冊一 卷九六八 外臣部 朝貢一 卷九七四 外臣部 褒異一 | (景初) 二年六月 倭王遣大夫難升米等詣帶方郡 求請天子朝獻 時太守劉夏遣吏將送詣京都 其年十二月 詔書報倭女王曰「制詔 親魏倭王卑彌呼 ……」 (景初) 二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏 遣使送詣京都 明帝景初二年 倭女王卑彌呼遣大夫難升米牛利等朝獻 詔以難升米為率善中郎將 牛利為率善校尉 …… |
| | 梁書 卷第五四 列傳第四八 諸夷（東夷諸戎・倭） | 至魏景初三年 公孫淵誅後 卑彌呼始遣使朝貢 魏以為親魏王 假金印紫綬 |
| 3年 | 北史 卷第九四 列傳第八二（倭） | 魏景初三年[七九] 公孫文懿誅後 卑彌呼始遣使朝貢 魏主假金印紫綬 |
| | 太平御覽 卷第七八二 四夷部三（東夷三・倭） | 魏志曰…… 景初三年 公孫淵死 倭女王遣大夫難升米等言帶方郡 求詣天子朝見 太守劉夏送詣京師 …… |
| | 日本書紀 神功皇后紀 | (攝政) 卅九年 是年也太歲己未 <small>魏志云「明帝景初三年六月 倭女王 遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏、遣吏將送詣京都也」</small> |
| | | |

※1 晋書 卷第九七列傳第六七四夷（東夷・倭人）では

漢末、倭人亂、攻伐不定、乃立女子為王、名曰卑彌呼 宣帝之平公孫氏也 其女王遣使至帶方朝見

其後貢聘不絕（※宣帝（魏の宣王 司馬懿仲達 晋の建国後、宣帝と諡された初代皇帝）

から日時は記述されていないが、宣帝が公孫氏を平定した後、女王が使者を遣わして帯方に至り朝見したと記述している。

2 中華書局版『北史』卷第九十四列傳第八二（倭）の「校勘記」で、「景初五年」を「景初三年」に校訂している。

〔七九〕魏景初三年公孫文懿誅後卑彌呼始遣使朝貢：

百衲、北、汲、殿四本「三」作「五」南本及梁書作「三」。

按三国志卷三〇倭傳云「景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡帶方郡 求詣天子朝獻。」又據三國志卷三

明帝紀 公孫淵被殺 在景初二年八月 若倭使是淵破後始末 則三國志倭傳之「二年」當是「三年」之誤

今從南本及梁書

（中華書局版「百衲本二十四史『北史』」3147頁）

なお、景初年号の通用期間は3年であるので、『北史』の景初五年は意味を成さない。

前回の例会の話題

- ・邪馬嘉国 名古屋市 田沢正晴
- ・『日本書紀』における倭人伝の引用（1） 瀬戸市 林 研心
- ・中村通敏著『真実の「邪馬台国」を求めて』を讀んで 名古屋市 石田泉城

例会の予定

- 1 日時 12月23日(土) 13時半～
 - 2 場所 名古屋市市政資料館
- 来月以降の例会 原則土曜日 (H6) 1/13、2/17、3/9、4/13
- 次号は投稿済みの原稿を優先します。